

# イデオロギーとユートピアを 一つの概念枠でセットとして捉える

相互の螺旋的好循環をはかるよう努めることが課題とされる

柳内 隆

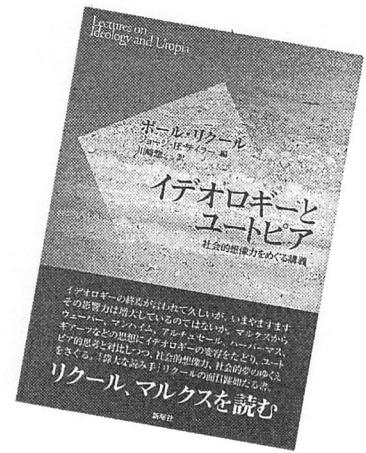
ポール・リクール 著  
ジョージ・H. テイラーブ 編  
川崎惣一訳

## ►イデオロギーとユートピア

社会的想像力をめぐる講義

6・10刊 A5判504頁 本体5600円

新曜社



今から40年ほど前に、『イデオロギー』といふ時代を画するアメリカ映画があり、最近のテレビ番組でこの映画がとりあげられた。映画のなかで、ジャック・ニコルソン扮する弁護士が次のようないいふことを述べる。「アメリカ人は『個人の自由』については大いに語るが、『自由な個人』を見ることは恐れる」。アバウトにしかおぼえていないが、おおよそじのようないセリフであった。その後、弁護士はヒッピーと自由な旅をしたという理由だけで、保守的な南部の人たちに撲殺される。まるで、1960年代に実際に起ったミシシッピ州での3人の公民権運動家の殺人事件を彷彿とさせる。犯人はKKK団のメンバー（白人）であり、被害者も北部の白人であった。リクールが言つてゐるに、ユートピアは外からやつてきて「所守の秩序を破壊するのだ」。個人の自由（イデオロギー）について語ることをアイデンティティとするアメリカ人にどうでも「自由な個人」（ヒッピー／ユートピア）は秩序破壊の存在でしかない。リクールの『イデオロギーとユートピア』を読んだ際、イデオロギーとユートピアの関係が、ジャック・ニコルソンのセリフに象徴され、彼が1975年の

今から40年ほど前に、『イデオロギー』といふ時代を画するアメリカ映画があり、最近のテレビ番組でこの映画がとりあげられた。映画のなかで、ジャック・ニコルソン扮する弁護士が次のようないいふことを述べる。「アメリカ人は『個人の自由』については大いに語るが、『自由な個人』を見ることは恐れる」。アバウトにしかおぼえていないが、おおよそじのようないセリフであった。その後、弁護士はヒッピーと自由な旅をしたという理由だけで、保守的な南部の人たちに撲殺される。まるで、1960年代に実際に起つたミシシッピ州での3人の公民権運動家の殺人事件を彷彿とさせる。犯人はKKK団のメンバー（白人）であり、被害者も北部の白人であった。リクールが言つてゐるに、ユートピアは外からやつてきて「所守の秩序を破壊するのだ」。個人の自由（イデオロギー）について語ることをアイデンティティとするアメリカ人にどうでも「自由な個人」（ヒッピー／ユートピア）は秩序破壊の存在でしかない。リクールの『イデオロギーとユートピア』を読んだ際、イデオロギーとユートピアの関係が、ジャック・ニコルソンのセリフに象徴され、彼が1975年の

秋学期にシカゴ大学で行つた講義録がもととなって書かれ、George H. Taylor, New York, Columbia University Press. 1986の邦訳である。勿論フランス語版もあり、私の本棚にも収まつていた。この著作ではイデオロギーとユートピアをそれぞれ別々に取り扱つており、イデオロギーの思想家としてはマルクス、アルチヤール、マンハイム、ウエーバー、ハーバーマス、ギアーリー、ハーバーマス、ギアーリーの順序で取り扱つていて、ユートピアについてはマンハイム、サン・シモン、フーリエを論じている。ただし、リクールはイデオロギーとユートピアを二つの概念は至る所で一種の緊張関係を孕んで描かれている。

この著作では、リクールはイデオロギーの作用を以下の三つの相補的なレベルで整理している。第一のレベルでは、イデオロギーは「歪曲・隠蔽」であり、偽意識として位置づけられ（マルクス）、第二のレベルでは権威による権力の正統化作用として説明され、第三のレベルではシンボル的体系による社会の統合化作用として論じられてきた（ギアーリー）。リクールは特に、第三のレベルに着目し、行為のシンボル的構造こそが、『イデオロギー』とユートピアの関係が、ジャック・ニコルソンのセリフに象徴され、彼が1975年の

前提となると考えた。

イデオロギーをシンボル的

シテー的性格を「社会の気分を高揚させる」変革の原動力として肯定し、サン・シモン

としている。

イデオロギー（シンボル的体系）として論じる際、人はイデオロギーの理論をどのように問題となる。リクールが「イデオロギーの外にある科学」の立場（マルクスやアルチヤール）も知識社会学の「中立的立場」（ウエーバー）の「価値自由」やハーバーマスの「理想的発話状況」も存在しないことに気がつく。ハーバーマスが「フーコーに対して「理性を批判しようとする企て」と批判した「自己言及のアボリア」と「マンハイムのパラドックス」は、同じ構図をとる。つまり永遠のトロジーになる。

ユートピアとは「どこにもない場所」という意味であり、それはシンボル的体系のなかで、イデオロギーの外にだる衝動（ユートピア）をもつ。人々はシンボル的体系のなかで、イデオロギーの外にだる衝動（ユートピア）をもつ。ユートピアは自分たちの共同避難であり、非現実的かつ秩序破壊的である。といつのは、ユートピアは自分たちの共同避難であり、非現実的かつ秩序破壊的である。といつのは、ユートピアは自分たちの共同避難であり、非現実的かつ秩序破壊的である。といつのは、ユートピアは自分たちの共同避難であり、非現実的かつ秩序破壊的である。といつのは、ユートピアは自分たちの共同避難であり、非現実的かつ秩序破壊的である。といつのは、

いることに疑いがない。イデオロギーとユートピアへの問いかけは「アクリティアリティ」を備えている」という訳者の主張に共感する。